

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16647

研究課題名(和文) ヨーロッパ初期活版印刷本の視覚的要素に関する研究

研究課題名(英文) Study of visual elements in early printed books in Europe

研究代表者

池田 真弓 (IKEDA, Mayumi)

慶應義塾大学・理工学部(日吉)・准教授

研究者番号：70725738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：15世紀後半のマインツで活動した活版印刷業者ペーター・シェーファーの出版物の装飾や挿絵といった視覚的要素の研究を行った。彼の初期の出版物では、伝統的な写本装飾のスタイルを大量に生産される印刷本で品質を維持した状態で再現するために独創的な手法を用いたことが明らかになった。一方後期の出版物では、初期作品と異なり、印刷物と親和性の高い木版挿絵が採用され始める。本研究のケーススタディで取り上げた2点の薬草事典に関しては、その出版にシェーファーの積極的な関与があったと結論づけることはできなかったが、挿絵の性質や内容を、それぞれの想定顧客層のニーズに合わせて調整していたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ペーター・シェーファーは、活版印刷術発明者とされるヨハン・グーテンベルクの弟子であり、その誕生と発展に寄与した人物である。そのため、初期活版印刷本の研究においても重視されているが、シェーファーの出版物の視覚的要素に関する本格的な研究は、本報告者のものをおいてほとんどない。本研究で明らかになったのは、出版物の装飾や挿絵を重要視し、積極的に活用しようとする姿勢と、種々の実験的な手法を試みて活版印刷術の可能性に挑戦した、進取の気性に富んだ人物の姿である。印刷業者としての彼の試みや姿勢といったものは、現代、新たな技術に対峙する際の我々にとっても極めて示唆的である。

研究成果の概要(英文)：This project examined visual elements such as decoration and illustration of books published by Peter Schoeffer (active in Mainz, 2nd half 15C). Through research it became evident that his approach towards visual elements changed significantly over the course of his career. In early years he employed creative methods to decorate printed books that would compare in quality with the illuminated manuscript. In later years, however, in place of creative approach to book decoration, he introduced woodcut illustration, which was a more suitable means than hand decoration to decorate printed books. The two herbal publications examined in this project unfortunately did not present Schoeffer's strong initiative in their planning. However, comparison of the two demonstrated that the style, design, and contents of the illustrations were adjusted according to the envisaged readers of each publication, thus attesting to the critical role played by illustration in publishing and marketing a book.

研究分野：美術史

キーワード：初期刊本 美術史 書物史 インキュナブラ 写本装飾 ドイツ

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

15世紀半ばにマインツ出身のヨハン・グーテンベルクが発明したとされる活版印刷術の研究には長い歴史がある。とりわけ、15世紀中に出版された活版印刷本はインキュナブラ(incunabula)と呼ばれ、その研究は、活版印刷術黎明期における本と出版の様相を明らかにするものとして盛んに行われてきた。様々な角度から研究がなされてきたインキュナブラであるが、その挿絵や装飾については、僅かな例外を除けばこれまでほとんど扱われてこなかった[1]。同時代に存在した華やかな装飾写本と比べると、装飾は僅かしかなく、挿絵にも有名作品が少ないインキュナブラは、美術史の研究者から注目されることはほとんどなかったのである。

一方報告者は、博士論文のテーマとして複数のグーテンベルク聖書の装飾を行ったことで知られる「フスト・マイスター」と呼ばれる写本・印刷本の装飾画家を取り上げた[2]。この画家は、グーテンベルクの直弟子でヨーロッパの商業出版のパイオニアとなったペーター・シェーフアー(1425年頃-1502年頃)の活動初期の出版作品の装飾にも携わっているが、これらの作品を研究する中で、シェーフアーが自身の出版物について、挿絵や装飾、フォントのデザイン等の視覚的要素を重視して製作・販売に当たっていたらしいことに気がついた。一方、シェーフアーの出版物の視覚的要素については、展覧会図録での言及や少数の論文による研究が存在するのみで、体系的な考察は行われてこなかった[3][4][5][6][7]。そこで報告者は、シェーフアーが視覚的要素をどのように導入・活用したのか、また、時期、出版物の種類等によってその活用の方法がどのように変遷したのか等、より体系的に分析する意義があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究では、ヨーロッパでの活版印刷術発明から間もない時代の本の視覚的要素を体系的に調査・分析し、その意義や役割を明らかにすることを目的とした。その具体例として、15世紀半ばから半世紀にわたってマインツで印刷業を営んだ商業出版のパイオニア、ペーター・シェーフアーの出版物を取り上げた。これまで断片的にしか行われていなかったシェーフアー作品の視覚的要素の分析を体系的に行い、シェーフアーが、これらをどのように活用し、商業出版という枠組みの中でどう活かしたのか、さらには彼の視覚的要素に対する姿勢を明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

(1) シェーフアーは、1455年頃にヨハン・グーテンベルクが行った活版印刷術による聖書出版に関わっているが、その直後、本聖書印刷事業の出資者であったヨハン・フストと組んでマインツに新たな印刷所を開設した。彼の出版事業は、1466年にフストが死去するまでを初期、それ以降を後期と分けることができるが、まず初期に出版された作品の一部の調査・分析を行った。具体的には、1457年出版『マインツ詩篇集』と、1459年出版『聖務の理論』を取り上げた。これら2作品は、博士論文でフスト・マイスターの作品の一部として扱ったが、本研究ではシェーフアーの作品として、彼の出版戦略という観点から視覚的要素を分析し直した。『マインツ詩篇集』については、装飾イニシャルを活版印刷で再現するという試みがなされており、その製作方法や製作意図などを詳細に検討した。『聖務の理論』に関しては、複数の装飾オプションを用意した点や、とりわけ独創的な方法で装飾イニシャルを挿入した例について、その手法の解明を中心に分析を進めた。

(2) シェーフアーの後期の作品の視覚的要素の分析の試みとして、互いに関連する2点の作品をケーススタディとして取り上げた。それらは、1484年出版『ラテン語本草』と、1485年出版『健康の庭』である。この2作品はともに、いわゆる薬草・薬物事典で、木版挿絵が多用されている(前者には150点、後者には381点の木版挿絵)。また両者とも、出版の企画にあたってはシェーフアーとは別の人物のイニシアチブが指摘されてきたため、その点について報告者自身でも検討した上で、彼らの製作意図や、挿絵の特徴や役割について考察した。

### 4. 研究成果

(1) 『マインツ詩篇集』は、フストとシェーフアーの共同運営による印刷所が最初に出版した作品である。本作品の過去の研究では、中世写本に多く見られる、2色のペンによる手描きの装飾イニシャルを精緻に再現した質の高い装飾イニシャル活字の製作方法に専らの関心が寄せられていたが、報告者はその問題に結論を出した上で、このイニシャルの製作・印刷のプロセスの詳細の解明、さらには、膨大な手間と労力を厭わず装飾イニシャルの印刷を敢行した印刷所の意図を考察した[8]。その結果、装飾イニシャル用の活字は、印刷を開始する時点までに全て準備していた訳ではなく、印刷作業と並行して必要分を製作していったということ、印刷の最終段階になり、新たなデザイナーがイニシャルのデザイン作業に参加し、より簡便な方法で活字を製作したらしいことなどが判明した。ついで、装飾イニシャルの印刷に用いられた青色インクの問題についても考察した。装飾イニシャルは赤、青の二色刷りが基本だが、青色インクはくすんだ灰色味を帯びており、手描き写本で用いられるような鮮やかな青とは程遠い色をしている。このインクの品質に印刷所は頭を痛めていた様子が、本詩篇集やその後出版された複数の作品を調査することで浮かび上がってきた。この青色インクに用いられた顔料の成分分析を依頼した結果、高価だが美しい発色のウルトラマリンや、やはり発色の良いアズライトなどではなく、主に染料として地元で生産され、安価に手に入る大青を使用していた可能性が高いことが分かった。色彩の

質と採算性の間で板挟みになっていた印刷所の事情が垣間見える例である。

本調査により、装飾イニシャルをテキスト本文と同様に活版印刷術で再現する手法は非常に手間がかかるということが明らかになり、これまで考えられてきたような、手描きイニシャルを安価かつ大量に再現するというシナリオには当てはまらないという結論が導き出された。むしろ、フスト・シェーファー印刷所は、手間をかけてでも、美しい装飾イニシャルを活版印刷術という新技術を用いて再現することにより、伝統的な装飾写本に慣れ親しんできた本書の顧客層であった教会関係者にも十分受け入れられる出版物の製作・販売を目指したと考えられる。当時は活版印刷術を懐疑的に受け止める向きもあり、とりわけシェーファーらがターゲットとしていた教会関係者のような保守層にその傾向が見られるのは想像に難くない。このような層にも活版印刷術が受け入れられるべく、手間と工夫を重ねて本書を製作した、と推察できる。

(2)『マインツ詩篇集』出版の2年後、フスト・シェーファー印刷所は『聖務の理論』を出版した。中世で最も広く読まれた典礼解説書である本書は『マインツ詩篇集』と同様、教会関係者が主な顧客層である。視覚的要素の分析という観点から見ると、本作品は実に興味深い[9]。本作品では、序文や各書冒頭に装飾イニシャルを挿入するべくページがデザインされているが、印刷所はこのイニシャルに3種の装飾パターンを用意した。1つ目は、『マインツ詩篇集』の場合と同様、装飾イニシャル用の活字を用いて印刷するというもの、2つ目は、イニシャルの挿入箇所を空白にしたまま販売し、購入者（使用者）が自ら好みのデザインのイニシャルを手書きで挿入するというもの、そして3つ目は、印刷所が手描きの装飾イニシャルを施して販売する、というものである。このように、複数の装飾パターンを用意するという点からだけでも本印刷所が視覚的要素を重視していたことが窺えるが、とりわけ3つ目のパターンは、他に類を見ない創意工夫により実現されている点が特筆に値する。というのは、このパターンに属する現存10作品は、一部の例外を除き、全てに同一の装飾デザインが用いられているからである。この第3装飾パターンを精査した結果、以下のことが明らかになった。まず、全装飾イニシャルのデザインは、基本的には一貫性のある様式で描かれていることから、一人の人物が担当したということ、ただし、本書の1ページ目でもある序文冒頭の装飾ページは、著名なウィーン宮廷装飾写本のデザインを引用しているということ。装飾のデザインについては、何らかの方法を用いて各コピーに転写したであろうことが従来より指摘されてきたが、本書では、現存コピーに残された痕跡などから、「粉打ち」という方法が取られた可能性が高いとの結論に至った。また、転写したデザインの彩色作業には、複数の彩色師（おそらくプロの装飾画家）が当たったようで、作業はコピーごとではなく、複数コピーの同一ページごとに配分されていたようである。作業自体は若いページから始められ、前半のページでは、せいぜい1人か2人程度の彩色師が作業に当たったが、後半のページになると、作業を早く終了させるためか、3人以上の彩色師で手分けして彩色を行っていた頁も存在する。特筆すべきは、どの彩色師も、基本的には転写したデザインから逸脱することなく、その輪郭線に忠実に彩色を行っているという点である。それぞれ個性を持った彩色師たちが、自らの個性を押し殺して所与のデザインに従うというのは、印刷所からそのような指示があつてのことと推察しうる。それに加え、ウィーン宮廷周辺で流布していたデザインを本書で最も目立つ箇所に用いたのも、デザイナー個人の判断からではなく、印刷所の指示によるものであろう。

以上の分析結果から明らかになるのは、印刷所が第3装飾パターンによる装飾を、極めて計画的に遂行したという事実である。そしてそれは、従来考えられてきたように、大量生産された書物を効率的に装飾するために行なった訳では必ずしもないということである。というのも、本書で使用されているような複雑な装飾デザインを厳密に転写し、そこから逸脱することなく丁寧に塗り上げるのは、熟練した装飾画家がフリーハンドで装飾を描くよりもはるかに手間と時間がかかるからである。おそらくフストとシェーファーは、自らが認めたデザインを高い品質で、しかもそれを均質に再現する手法を模索したのであろう。その傾向は、印刷による装飾イニシャルを用いた第1装飾パターンにも当てはまる。このように、高品質の装飾を均質に「複製」することで、フスト・シェーファー印刷所は自身の製品の「ブランド化」を目指したと考えられる。書物の内容だけでなく、装飾を含めた物理的な品質の向上と担保を通じ、自らの出版物の差異化を図ったのであろう。

(3) シェーファー印刷所後期の作品である2点の薬草・薬物事典、1484年出版『ラテン語本草』と1485年出版『健康の庭』を比較分析した[10][11]。この2作品については、シェーファーがどの程度企画や挿絵製作に関与したのかについて検討したが、従来より推察されてきた通り、彼がイニシアチブを取って製作したのではなく、別の人物が持ち込んだ企画を請け負って印刷した可能性が高いのではないかと現段階では考えている。ただ、両作品ともシェーファーの出版物中初めに、膨大な数の木版挿絵を用いたという点で、重要な作品であることに変わりはない。

互いに1年違いで出版され、さらに、両者ともヨハン・ヴォネッケ・フォン・カウブ (Johann Wonnecke von Kaub) という名の医師が編纂に関わったとされていることから、これまで両作品の密接な関連が指摘されてきていたが、こと挿絵を比較すると、むしろ顕著な特徴の違いが浮き彫りになる。両者とも、挿絵のデザイン制作には複数の画家が関与していたと考えられるが、『ラテン語本草』の場合、挿絵の様式やサイズに統一感が見出せる。比較的簡略化され、いわゆる写実的描写とは呼べないものが大半で、無駄な線や陰影がほとんどない、押し花を思わせるような明瞭で均質化された表現方法が全挿絵で看取される。このような独特の特徴を理解するには、本書の想定読者層を含めた性質を考慮する必要がある。本書の内容や、比較的扱いやすい小型の書籍であること、序文の文言や確認しうる出版当初の所有者等を総合すると、この本はまず第一に、

ある程度薬草の知識を持った人間が使用するために、必要最低限の情報を掲載したコンパクトで実用的な薬草・薬物事典であったと考えられる。

翌年出版された『健康の庭』は、かなり趣を異にする。上述の通り、本文は医師フォン・カウプが編纂したと推測されるが、本書の出版を企画したのは、マインツ大聖堂参事会員で貴族のベルンハルト・フォン・ブライデンバッハである。彼は序文で、本書を企画した理由として、種々の薬草の効能を「正しい色と形で」あらわした本を出版する必要性を感じたと述べている。さらに、その目的を達成するため、エルサレムへの巡礼に赴いた際に有能な画家を帯同し、現地の薬草を描かせたとある。ここで言及されている画家は、ユトレヒト出身のエルハルト・ロイヴィッヒと同定されている。

それでは、本書の挿絵は全て「正しい色と形」で、つまり写実的に描かれているのであろうか。実は、写実的に描かれた絵と、極めて概略的に描かれた絵が混在しているのみならず、多くの挿絵には既存の写本モデルが存在したことも過去の研究で明らかになっている[12]。それに加え報告者は、当時中ライン地方で流通していた、通称「銅版トランプ」をはじめとする版画もモデルとして使用されていたことを指摘した。

それでは、「有能な画家」ロイヴィッヒはこの作品にどの程度関わったのであろうか。過去の研究では、全挿絵中65枚程度が写実性、芸術性ともに高い作品としてロイヴィッヒの手に帰されているが[12]、報告者は、本書の全挿絵の精査とロイヴィッヒの他の作品との比較を行った結果、彼の手になるものは、扉絵と第4書冒頭の挿絵を含めても20に満たないと結論づけた。さらに指摘すべきは、彼が挿絵を担当した動植物のほとんどは、玉ねぎやほうれん草、野兎など、ドイツ国内で目にするもので、エルサレム巡礼の際に異国の薬草を描かせ、それを反映した挿絵はほぼ皆無であるという点である。

以上の通り、序文で展開されているブライデンバッハの主張は、必ずしも額面通りに受け取るわけにはいかない。とはいえ、医療分野については全くの素人であったブライデンバッハが、国内外の動植物を描いた400枚近くの挿絵を附した極めて野心的な薬草・薬物事典を出版したことは注目に値する。当然、『ラテン語本草』とは想定購買層も異なるであろう。報告者はそれについて、必ずしも医師などの専門家だけではなく、国内外の動植物に興味を持つ富裕層が想定されていたと考える。エルサレム巡礼という、異国情緒を掻き立てるキーワードの使用、才能ある画家の採用、ふんだんな挿絵など、素人でも心惹かれるコンテンツが意識された本書のもう一つの特徴は、執筆言語が、医師の専門言語であったラテン語ではなく、一般人でも読むことのできるドイツ語であったという点である。さらに、国内の薬草・薬物のみを扱っている『ラテン語本草』に対し、写実的描写は少ないとはいえ、国内外の動植物を多く採録した『健康の庭』は、単なる薬草・薬物事典ではなく、16世紀以降に花開く珍品コレクション文化を予告するような、富裕層の知的好奇心を満たす一冊だったといえよう。

上述の通り、『ラテン語本草』と『健康の庭』はともに薬草・薬物事典でありながら、全く異なる性質の挿絵を持ち、異なる使用者像が想定される。それはとりもなおさず、挿絵を含めた視覚的要素が、書物の核である本文の内容に劣らず重要な役割を持っていたことを意味する。残念ながら、これら2作品の出版にシェーファーがどの程度関与したのかは明確ではないが、彼がこの前後に出版した他の木版挿絵入り作品と比較することで、その位置づけも明らかになると考えている。

(4) 上記のケーススタディで得られた知見から、以下のことが明らかになった。まず第一に、本研究を計画した当初の予想通り、シェーファーが自身の出版物の視覚的要素を重視し、積極的に活用していたということである。出版するテキストの選定はもちろんのこと、それをどう視覚的に提示するのかという点について、ターゲットとなる購買層の傾向や嗜好を考慮し、慎重に計画していたようだ。のみならず、とりわけ初期の作品では、彼もしくは共同経営者のフストの進取に富んだ気性からか、極めて独創的な方法で、質の高い装飾を「量産」する試みを行っていたのも興味深い。後期の作品については、ケーススタディの不足から現段階で結論を引き出すことは難しいが、活版印刷術発明の黎明期を過ぎ、印刷本の新奇性が薄れると同時に出版業務の効率化、分業化が進んでいった時期でもあることから、初期の実験的な試みが影を潜め、代わりに印刷本とより親和性の高い木版画の採用を始めている。その際、挿絵の性質や内容を、想定顧客層に合わせてコントロールしていたことが窺える。

本研究では、シェーファーというインキュナブラ時代を生きた出版業者の作品の視覚的要素を追うことで、当時の出版業がどのような方向に進んでいたのかを俯瞰することができたと考えている。

#### <参考文献>

[1] König, Eberhard. "Die Illuminierung der Gutenbergbibel." In *Johannes Gutenbergs zweiundvierzigzeilige Bibel: Faksimile-Ausgabe nach dem Exemplar der Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz Berlin*, edited by Wieland Schmidt and Friedrich Adolf Schmidt-Künsemüller, 69–125. Munich: Idion, 1979.

[2] Ikeda, Mayumi. "Illuminating Gutenberg: The Fust Master and Decoration of Incunables and Manuscripts in Mainz and Palatine Heidelberg." PhD diss., The Courtauld Institute of Art, University of London, 2010.

[3] Schneider, Cornelia. *Peter Schöffer: Bücher für Europa*. Schriftenreihe des Gutenberg-Museum

Mainz, Nr. 2. Mainz: Gutenberg-Museum, 2003.

[4] White, Eric Marshall. *Peter Schoeffer: Printer of Mainz. A Quincentenary Exhibition at Bridwell Library. 8 September-8 December 2003*. Dallas: Bridwell Library, 2003.

[5] Hellinga, Lotte. "Peter Schoeffer and the Book-Trade in Mainz: Evidence for the Organization." In *Bookbindings & Other Bibliophily: Essays in Honour of Anthony Hobson*, edited by Dennis E. Rhodes, 131–83. Verona: Valdonega, 1994.

[6] Hellinga, Lotte. "Peter Schoeffer and His Organization: A Bibliographical Investigation of the Ways an Early Printer Worked." In *Biblis: The Georg Svensson Lectures, 1993, 1994 & 1995*, edited by Gunilla Jonsson, 67–106. Stockholm: Föreningen för Bokhantverk, 1995.

[7] König, Eberhard. "Buchschnuck zwischen Druckhaus und Vertrieb in ganz Europa: Peter Schöffers Hieronymus-Briefe von 1470." In *Johannes Gutenberg—regionale Aspekte des frühen Buchdrucks: Vorträge der Internationalen Konferenz zum 550. Jubiläum der Buchdruckerkunst am 26. und 27. Juni 1990 in Berlin*, edited by Holger Nickel and Lothar Gillner, 130–48. Berlin; Wiesbaden: Staatsbibliothek zu Berlin; Reichert, 1993.

[8] Ikeda, Mayumi. "Chapter 5: The Fust and Schöffer Office and the Printing of the Two-Colour Initials in the 1457 Mainz Psalter." In *Printing Colour 1400–1700: History, Techniques, Functions and Receptions*, edited by Ad Stijnman and Elizabeth Savage, 65–75. Leiden; Boston: Brill, 2015.

[9] 池田真弓「初期印刷本の装飾方法：一四五九年マインツ出版『聖務の理論』を例に」青野純子、今井澄子、望月典子、望月みや編『移ろう形象と越境する芸術：小林頼子先生退職記念論文集』東京：八坂書房、2019年、337–69頁。

[10] 池田真弓「ペーター・シェーファー出版『ラテン語本草』と『健康の庭』—15世紀印刷本草の挿絵分析—」『鹿島美術研究』第32号別冊、2015年、76–87頁。

[11] 池田真弓「『健康の庭』—本草挿絵の諸問題について」『言語文化』33号、2016年、28–46頁。

[12] Schuster, Julius. "Secreta Salernitana und Gart der Gesundheit: Eine Studie zur Geschichte der Naturwissenschaften und Medizin des Mittelalters." In *Mittelalterliche Handschriften: Paläographische, kunsthistorische, literarische und bibliotheksgeschichtliche Untersuchungen. Festgabe zum 60. Geburtstag von Hermann Degering*, edited by Alois Bömer and Joachim Kirchner, 203–37. Hildesheim: Georg Olms, 1926.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 池田真弓	4. 巻 33
2. 論文標題 『健康の庭』 本草挿絵の諸問題について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 言語文化	6. 最初と最後の頁 28-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Mayumi Ikeda
2. 発表標題 Illustrating the Gart der Gesundheit of 1485
3. 学会等名 50th International Congress on Medieval Studies（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 池田真弓
2. 発表標題 『健康の庭』 本草挿絵の諸問題について
3. 学会等名 創造・伝達・記憶の場としての版画（招待講演）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Mayumi Ikeda
2. 発表標題 How to Decorate Printed Books: The Case of Fust & Schoeffer 's Rationale divinatorum officiorum (1459)
3. 学会等名 In Principio: The Beginning of Europe 's Printed-Book Trade（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 青野純子、今井澄子、望月典子、望月みや、小林頼子、ミヒヤエル・ノルト、鎌田由美子、萩原裕子、ズザンナ・ファン・ライフエン＝ゼーマン、マルテン・ヤン・ボック、樋澤明、奥窪宏太、金原由紀子、池田真弓、大高幸、上杉真理子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八坂書房	5. 総ページ数 491
3. 書名 移ろう形象と越境する芸術：小林頼子先生退職記念論文集	

1. 著者名 Ad Stijnman, Elizabeth Savage, Doris Oltrogge, Mayumi Ikeda, Andreas Uhr, Kathryn M. Rudy, Alice Klein, Naoko Takahatake, Linda Stiber Morenus, Beth A. Price, Nancy Ash, Haddon A. Dine et al., Edward H. Wouk, Marjolein Leesberg, Anja Grebe, Alexander Dencher, Jun Nakamura, Simon Turner, Elmer Kolfin and Marrigje Rikken	4. 発行年 2015年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 248
3. 書名 Printing Colour 1400-1700: History, Techniques, Functions and Receptions	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

国際シンポジウム企画：The Book in Transition, the East and the West, 2018年。
--

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----